ています。しかも３階部分に床が張られていて、それをタカと呼びます。この「ナカノマ」の上が吹き抜けていて、２階の床がこのように一部見えています。

このようにタカ（３階物置）が吹き抜けの周りを複雑に取り囲み、非常に立体的な空間が内部に広がっています。

この大きな空間をおしゃれに活かしたいものですね。

間口が狭くても、中に入ると意外とその大きな空間の塊が広がっていることが実感できます。

このことは出石の町家の内部空間の大きな特徴です。ですから、単純に天井を貼ってしまってこういう空間をつぶしてしまうのは、少し残念なふうにも思います。

江戸時代から継承されている町家の構成と明治以降発展した吹き抜け構成

さて、重伝建の選定を受けるに当たっては、田結庄の小幡家住宅の調査をさせていただきました。弘化４年（1847 年）の祈祷札が発見されて、明治９年の火災を免れた数少ない町家ということがわかりました。（※伝建かわら版第９号参照。）

小幡家住宅は、１階のお座敷、２階のお座敷があり、真ん中の部屋のところが吹き抜けになっていて、そこに大きな神棚が下げられています。

このように、現在出石に残っている建物の形式が江戸時代に建築された小幡家住宅にさかのぼることができたことから、近世の城下町としての伝統的な町家形式は、明治以降にも確実に引き継がれてきているのだということが確認できたわけです。

外観の特徴１　～虫籠窓～

さて、外観の話をします。

町を歩くと、町家の形が大変多彩です。大変さまざまな外観構成要素があります。これを修景の基準としてどのように整理し、どうまとめていくかはなかなか難しい宿題と思うわけですが、かいつまんで特徴的な点だけをお話しようと思います。

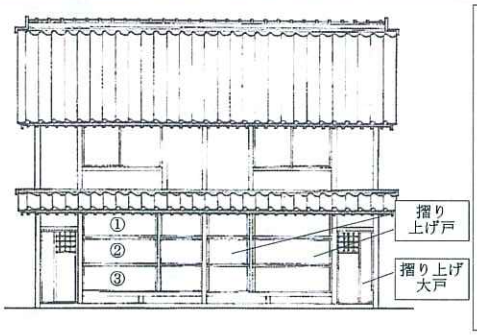
まず、虫籠窓（むしこまど）ですね。虫籠窓だけとっても、さまざまな形があって、大変おもしろいです。

外観の特徴２
～摺り上げ戸、摺り上げ大戸～

今はほとんど残っていませんが、調査の時には、唯一このお宅に摺（す）り上げ戸が残っていました。この雨戸のような板を柱溝のレールに沿って下ろすと、外観上は板だけになるわけですね。

戸を閉めると家の中は真っ暗になってしまうので、このお宅ではこのようにガラスを中にはめ込む改造をされたようです。

明治前期、中期に建築された町家はほとんど摺り上げ戸のスタイルでした。



上記の建物の復原図。左右対称の２戸で１棟の建物です。両端に大戸（玄関）がありますが、これも摺り上げます。

右下は摺り上げ大戸を押し上げた１階の様子。左上は、別の建物の２階の摺り上げ大戸、摺り上げ戸を格納する戸袋。

昼間は摺り上げ戸、摺り上げ大戸とも引き上げられてしまうので、まったくオープンな構えになります。これが出石の町家の店構えの標準形でした。

調査により、古い町家のほぼ９割方は、このような摺り上げのスタイルだということが確認できました。

引き上げた摺り上げ戸を格納する部分

柱に設けられた、摺り上げ戸を通すレール

１階の窓の上部（窓鴨居）に残されていた留め栓の痕跡。３枚の摺り上げ戸を引き上げた最後に栓で留めます。

さて、このような町家を、当初の形式、すなわち復原形式を理解した上で、どのように修理するか、ということを考えていかなければなりません。

外観の特徴３
～改修により現れた格子～

次に、出石独特の格子の構えがあります。

欄間の所に独特の飾りがあり、中から外を覗き見ることができます。

普通に考えれば、こういった格子戸による外観形式が修景の一つの拠り所になるでしょう。

ただし、「格子戸はある段階から改修された結果なのだ」ということをきちんと理解しておいていただきたいですね。

もとは摺り上げ戸の外観が、途中で格子に改築された町家が大変多いのです。

こういったものをきちんと採寸していただいて、このディテール（細部・詳細）を基準にした修景マニュアルを作っていただくと良いわけです。

建築当初は完全に摺り上げ大戸だったが、ある段階に半分だけ格子を入れて、後はガラス戸にされています。

外観の特徴４
～もともと建築時から設置された格子～

一方、このお宅は建築当初から格子をはめておられますので、復原をしても摺り上げ戸にはなりません。

大正８年に建築された建物。当初から格子をはめていたことが確認されています。

このような商いをしないお宅では大きく店を開ける必要がないので、最初から格子が入っています。

あるいは、大正頃になるとこのような格子の構えが普及してくるのだろうと思います。

外観の特徴５
～軒高が高く、ガラス窓の戦前の建物～

これは、昭和戦前期に建てられたお宅です。

時代が現代に近づくにつれて、軒の高さが高くなります。

非常に軒高が高くなり、２階には最初からガラス窓が入ってきます。これが昭和期の町家の年代的な特徴の一つです。ですから、昭和の町家を修理する際には、このようなガラス窓などをきちっと参照していただきたいと思います。

昭和の町家には、格子も出格子も、最初から付

いているということです。

ですから、明治以降も大正、昭和というように時代を経るごとに外観のスタイルが違うのだということも理解をしていただきたいと思います。

関宿に見る、摺り上げ戸の痕跡のある建物の修理方法

ここで、三重県亀山市にある、重要伝建地区に選定されている関宿伝建地区を見てみましょう。

三重県亀山市関宿伝建地区の玉屋さん。摺り上げ戸を完全に下ろした状態。大変閉鎖的で、中は真っ暗になります。

開けると、フルオープンになります。内側から見ると、押し上げて留めているという状態がわかります。

この町には、摺り上げ戸、摺り上げ大戸を持つ町家が多く残っています。出石の町家もこのような姿が店構えの原型だということになるわけです。重要な点は、関宿ではどのような修理、修景をしているかということです。

この建物（右写真）は摺り上げ戸の痕跡がこの両側の柱に溝として残っていましたから、ここに本来は摺り上げ戸が入っていたことが確認できました。

そこで、摺り上げ戸の形式を留めながら、その内側に障子やガラス戸を入れています。摺り上げ戸では実際生活ができないのだけれども、摺り上げ戸の形をこういうふうに表現して残している。これがこの町の一つの修理のスタイルになっているわけです。

この建物（右上写真）は、摺り上げ戸をそのまま残しているお宅ですね。その内側にガラス戸を入れている事例です。

ですから、摺り上げ戸の形を尊重し、できるだけその形を残して、けれども実際の生活に便利なようにその表側とか内側にそれ以外の装置を組み込んでいるのだという考え方で修理しているわけです。

出石のオリジナルな形式をどのように修理、修景で表現していくか

出石の町家について、内部の構成、それから後半は外観、特に摺り上げ戸というものがオリジナルな形式だということをお話しました。

そういったものを外観の修理修景にどのように表現していただけるか、それが私としては大変期待をしているところです。

ですから、「単に格子を張り付けて終わり」というようなことにならないよう、いろいろな工夫をしていただければ嬉しいな、という思いを持っております。

どうもご清聴ありがとうございました。

★参加者の感想★

（地区外、出石以外の方もおられます。）

★講演を聴いて、出石の良さを再認識しました。
★出石が城下町としての伝建地区指定された 3 地区の中の 1 つであることはすばらしい！
★講演は初めて聴くことが多く参考になりました。
★講演を聴いて、摺り上げ戸などいろいろ発見があって楽しかった。
★摺り上げ戸が出石の特徴という話は意外でした。
★現代生活の中で摺り上げ戸をどうするか気になっています。
★関宿伝建地区は摺り上げ戸のデザインをうまく残して修理していることに感心しました。
★「タカ」や「大戸」に興味を持ちました。
★造りは他の事例を見ても似ているところもあるが、何か出石の個性を感じる部分もあります。そこに込められた知恵を残していく必要があると思います。